

海外調査の魅力と課題 —タイにおける調査から—
 Attractions and Challenges of Investigation in Abroad
 —An investigation in Thailand—

中村 周平
 Shuhei NAKAMURA

はじめに

我が国において短期(1ヶ月以内)の海外派遣研究者数は増加傾向にあり(図1)、研究対象としての海外への関心は年々高まっているといえる。海外調査が魅力的なものとなってきた一方、困難な場面も存在する。タイで行なってきた調査からこの魅力と課題を考察する。

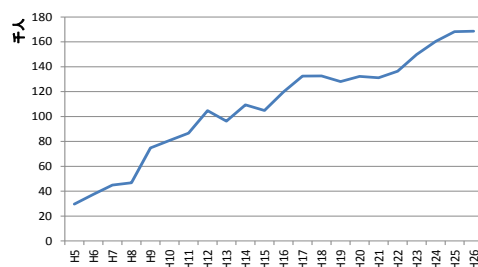


図1 短期派遣研究者数の推移¹⁾

Fig.1 The transition of number of short-time overseas deployment researchers

タイにおける調査

タイでは近年の経済開発により、輸出産業の発展、インフラの整備、物価の上昇といった社会変動が進行している。これに伴い農村部においても出稼ぎ等による労働力の流出、賃金の上昇といった変化を余儀なくされている。この影響で水稻生産方式は大きな転換期を迎えており、とくに米の植付け方法は手植えや田植機による移植、バラマキや筋蒔き機、散布機による直播、あるいはそれらと異なる独自の手法などタイ各地で多様な試みがなされている。この変化の時期にあるタイの多様な植付け方法の動向を把握し、将来における展望を探るために、タイの3地域(図2)において現地農家へのアンケートによる聞き取り調査を行ってきた。調査を進めるにあたっては、タイ・バンコクのカセサート大学の学生の協力のもと進められている。まずアンケートを英語で作成し、カセサート大学へ送付、タイ語に翻訳してもらい、現地で用いるアンケートとする。聞き取り調査後は聞き取り内容を英語へ再翻訳し、調査結果の取りまとめを行う。



写真1 聞き取り調査の様子

Photo1 The look of investigation



図2 研究対象地

Fig.2 Study Areas

宇都宮大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Utsunomiya Univ.

Keywords: 海外調査, タイ, 聞き取り

聞き取り調査結果

(1)中央平原 伝統的に行われていたバラマキによる直播に代わり、田植機を用いた移植の委託・請負が普及している現象が確認された。コストの面で直播よりも不利であると考えられた移植であったが、移植を委託する農家への聞き取りにより、収量の増加、施肥や雑草・突然変異種の除去等の栽培管理の容易化といった利点が明らかになった。また、田植え請負業においても、利益率が20～30%程度と十分な利益が見込めることが明らかとなった。これらより、田植機による移植は合理的な方法であり、今後普及はさらに進むと予測された。

(2)北タイ 農村部における労働力不足と労働コストの上昇により、従来の手植え移植が困難となっている現状がみられた。この地域の水利・圃場条件は日本と類似する特徴を持ち、上述の労働力不足への対応には当初は田植機導入といった機械化が考えられていた。しかし、手植えに代わる方法として、土付きの苗を手でそのまま圃場へ投げ入れる‘Yawn’や、発芽後3日の種を手により筋植える‘Mok’など従来にはみられなかった新しい方法が確認され、植付け方法の多様化の動きがみられた。



写真2 Yawn で用いる育苗ポッド

Photo2 Raising seedlings pot for

(3)東北タイ 灌漑地区においては、中央平原同様に田植え委託・請負が行なわれていたが、中央平原よりも収量が低水準で、さらにバラつきも大きいという現状が確認された。灌漑導入の利点として収量の高位安定化が挙げられるが、その効果が地域により発揮されにくいことが明らかになった。天水田地区については、従来の手植えが労働力不足と水不足により困難となっている現状が確認された。当地域の圃場条件から、一般に手植え以外の方法はできないとされているが、この手植えの代わりとして直播が「捨てづくり」的な対応として行われていた。また、塩害による土壤劣化も確認できた。これらのことから当地域の稲作は今後立ち行かなくなってくるといえ、新たな土地利用を検討する必要性が示唆された。

魅力と課題

海外調査の魅力の1つは、新しい現象との出会いである。中央平原における田植え委託・請負の拡大や、北タイにおける新しい植付け方法などは、日本では決してみることでできないものであり、タイでの調査は興味深い現象の連続であった。ここに、海外調査の1つの「面白さ」があると考えられる。また、異なる言語、文化との出会いもまた、海外調査の魅力であると考えられる。なぜなら、異なる言語・文化の背景には異なる物事の捉えかたがあり、これらと触れ合うことで、視野を広げることができるからだ。例えば、タイにおいて伝統的に用いられている面積の単位に‘rai’というものがある。40m×40mの面積単位で、haに換算すると1rai = 0.16haである。現在山林や農用地等でも使われることもある単位であるが、従来は「人ひとりを養える米の量を収穫できる広さ」とされており、旧来より米を主要作物として育ててきてきたタイならではといえる。海外調査の課題としては、仮説にない予想外の現象が挙げられる。東北タイ灌漑地区では、仮説として中央平原同様収量が安定していると考えていたが、実際に調査に入ると、上述のような反対の結果が確認された。そのため、研究の方向性を再検討せざるをえないこととなった。このように海外調査には魅力が大いにあるが、それは困難な事態を招く課題と表裏一体となる可能性がある。